雨の物語

伊湖夢巣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨の物語

【Ｎコード】
Ｎ５２５６Ｑ

【作者名】
伊湖夢巣

【あらすじ】
あつしは弁護士を目指し東京の大学に進み、美奈代は田舎に残りお互いの生活をしていた。
大学生のあつしと圭子の所に突然現れた美奈代。その２年後に美奈代は他の男と結婚した。後に離婚し消息不明になる。その頃、あつしは大学を卒業し法律事務所で司法試験に臨んでいた。
そんなあつしに、友人の孝一が会社を辞めアメリカに旅立つと、告げるた。
孝一がアメリカで出会ったキャスリン、彼女との出会いであつし、

美奈代、孝一、桂子、四人の人生が、又絡んでいく。

プロローグ（前書き）

文学的恋愛小説

ちょと恋の物語に挑戦してみます。

プロローグ

その人は聖橋から空を見上げていた。
両手をかざして眩しそうに空を見上げていた。
そして風の中に何かを聴いていた。

その音楽は遙か昔に・・・・。
そう、子供の頃、
家の近くで聞こえた、なんとも心地よいあの音楽だった。
体中を暖かな空気で包んでくれた、あの音楽だ。
どこから聞こえてくるんだろう・・・・・？

その人は、空にかざした両手を降ろし、あたりを見回している。
緩やかな風が木々を揺らし、サワサワと音をたてている。
その人は、
「フッ・・。」とため息をつき、歩き出した。
大きな荷物を軽々と肩に担ぎ、何かをつぶやきながら、聖橋をあとにした。

そう・・・
それはあてのない孤独な一人旅・・・
誰一人として同じ途を歩む者はいない。
まるで「人生」と言う名の道しるべを探しているかのように・・・。
人は歩き続ける。

急に、その人の足が止まった。
「やはり聞こえる・・・・・。
あの音楽が・・・・・。」
その人は聖橋で聞こえたあの音楽を耳にした。

あたりを見渡したが、他の誰もいない。
心地よい風が、吹いているだけだ。

再び歩き出そうとした時、
ふと思い出したように大きな荷物を肩から降ろした。
その荷物の中を、ゴソゴソと探り出した。
その動きがピタッと止まった。

その人の手には、小さなオルゴールがあった。
その風貌からは、どう見ても似合わないかわいいオルゴールだった。
笑みがもれた。

少なくとも私にはそう見えた。
大きな荷物に腰を下ろし、オルゴールのねじを巻き、
その流れるメロディを聴いている。

目の前には妻恋坂・・。
昔、別れた優しい恋人の笑顔も浮かんでくる。
その人の回想が静かに進んでいく・・。

プロローグ（後書き）

この物語のでだしは、私の書いた物ではありません。
しかし、一応作者の了解は得ています。

1章　雨宿り　1節

あれは、１９歳の夏だった。あつしは東京で、あの娘は田舎で学生生活を送っていた。

夏休みに入ってまもないころ、あの娘からの突然の電話にびっくりした。

受話器からは、日頃おとなしい、あの娘の口からは想像すらできない言葉が楽しそうに弾んできた。

私は、半信半疑のまま自転車をこいでいた。

２０分も走っただろうか、心臓の鼓動を強く感じはじめたそのときに…

湯島聖堂の前であの娘が、はにかみながら白く細い腕を振っていた。

春に別れたときと同じ、くせのある長い黒髪が風になびいている。

ノースリーブの真っ白な長いワンピースに身を包み、太陽の日差しから肌を守るオーガンジーのストールに白い靴。

私の目には、まるで逃げ出してきた花嫁のように映っていた。

「どうしたの・・？迷惑だった・・？」と、問いかけるあの娘の声で、ふと我にもどったような気がした。

あの娘を自転車の後ろに乗せて、神田川から早稲田へと走った。

面影橋のあたりにつくとき、あの娘がやっと口を開いた。

夏休みの間、おじさんの家に遊びにきたこと。

あつし宛に、春から２０通も手紙を出しているのに、２通しか返事がこなかったこと。

大きな瞳に涙を浮かべながら、便りがないのはゲンキな証拠って、おばあちゃんが語ったこと。

でも、……と、いいかけて暫く沈黙の時間が続いた。

そして、女子友達の従弟という男性と文通をはじめたことを、あの娘は一気にしゃべった。

あつしはと言えば、毎日のアルバイトと仲間で結成した、フォークバンドのことしか話せなかった。

都会での孤独と誘惑など、あの娘には想像もつかないことだろうと思った。

あの娘は「私がここにいる間、キーボードで仲間にいれてよ」と、言った。

あつしは、一瞬答えにつまった。

あつしの後ろであの娘は、清らかな声で歌い始めた。

「一人で空を見ていたら～優しい風に包まれた～どこかで、泣いて

いる人の涙がきっと乾くよう～」

あつしは黙って聞いていた。

ただ黙ってそのメロディーを聞いていた。

涙橋に近づくころ、雨が降り始めた。

なぜだかわからないが、優しい雨のように感じた。

雨に濡れても、あの娘の歌は続いていた。

でも、さすがに雨の中を自転車で走るのは辛くなってきた。

自転車のブレーキをかけると、歌を歌っていた彼女は、あつしの背中にその身を押しつけてきた。

いや、押しつけたのではなく、不可抗力でバランスを崩し、寄りかかってきたと言うのが、正解だった。

いつもは前を通り過ぎるだけの、ちょっとしゃれた喫茶店で雨を凌ぐことにした。

入り口を開けると、「カラ～ン」と、心地よいカウベルの音が響いた。

耳に聴こえてきたのは、カーペンターズの曲。

目の前には、優しい目をした中年のマスターだった。

こじんまりとした、その喫茶店の窓には白いレースのカーテンがかけられている。

テーブルの上にはブルーのチェックのクロスがかけられていた。

彼女の好みにぴったりとあっていたせいか、うれしそうな顔をして一番奥の席に彼女は座った。

1章　雨宿り　1節（後書き）

カーペンターズって、古いですね。
読者の中には、あまり知られていない、かもですね

1章　雨宿り　2節

カーペンターズの曲に聴き入っている彼女が、唐突に口を開いた。

「ねえ、あっちゃんのアパートに今日泊まってもいい？叔父様に友達の家に泊まるって言ってきたの」そう言ってにっこりと笑った。

あつしは、思いもかけない彼女の言葉に驚きの表情を隠せなかった。

「えっ？じゃあ桂子にも連絡して3人の同窓会にでもしようか？」と咄嗟に答えてしまった。

「あら、桂子に連絡がつくの？長いことあってないなぁ・・」

何か考えているようであったがそれでも「嬉しい」と素直に喜んでいるように感じた。

あつしは入り口にある公衆電話に向かった。桂子に電話をかけるために。

あつしの部屋を、片付けておいてほしいと頼むために。

そして席に戻ると、彼女が話しはじめた。

2歳年上の兄と、拓郎の「つま恋コンサート」に行ったこと。

そこは、雑誌でみるような服を着た、若者が多勢いたこと。

そして、そのファンの熱狂ぶりに驚いたこと。

京都に住む兄のアパート周辺に、居酒屋「大将」があり、そこの息子が偶然にも、美奈子と誕生日が同じで、同い年であったこと。

いろんな不思議がたくさんあって、世の中って面白いね。と、くったくなくおしゃべりを続けた。

あつしは、そんな彼女を眺めていて「孤独を知らないお嬢様だな」などと考えていた。

そういえばあつしは、彼女の口から悲しいことや辛いこと苦しいことなど、何も聞いたことがない。

手紙の内容もそうだ。いつも楽しいことばかり。

何ひとつ悩みごとなど、抱いたことはないのだろうなと、思っていた。

ふと時計を見たら2時間近く経っていた。

「出ようか」そう言って、あつしは彼女を促した。

雨はあがり、気持ちいい風が吹いていた。

あつしは、自転車をおしながら彼女の横を歩いた。

「あっちゃんって無口になったね。きっと私の知らないあっちゃんがたくさんあるんだね」

そう言って彼女は、いたずらっぽく笑った。

そして、隅田川を眺めながらゆっくりと、あつしのアパートへと向かっていった。

アパートの近くの商店街で買い物をした。美奈代は花火を買っていた。

美奈代は料理ができるんだろうか、そんなことを思いながら、今夜のメニューはソーメンと焼き魚、おにぎりに卵焼き、そして具だくさんの味噌汁に決まった。

そうそう、ビールに「いいちこ」まで揃えた。

あつしは、飲まずにはいられない心境だった。

1章　雨宿り　2節（後書き）

昭和の風情が、ぷんぷんとする1章目です。

1章　雨宿り　3節

あつしのアパートについた時には、5時をすぎていた。
美奈代は綺麗に片付いているんだね。と、
しきりに関心しながら、壁に掛けられたミッキーマウスの時計を見ていた。

そして台所にたち米を洗いはじめた。
次に魚を焼く準備そして卵まで溶き始めた。

そんな風景を、あつしは窓辺に腰掛けて不思議な面持ちで眺めていた。
6時を過ぎたとき「あっちゃん、今のうちにお風呂屋さんに行ってこようよ」と彼女が促した。

誘われるままに近所のお風呂屋さんに向かい、帰りついたのは7時だった。
それから美奈代は、また料理をはじめた。

味噌汁のいい香りと、焼き魚の匂いに、故郷の母を思い浮かべていたとき、ドアを叩く音がした。
桂子だった。桂子の少し緊張した顔は、美奈代の声ですぐにかき消された。

美奈代は、やっぱり都会で生活する女性は素敵だねと、桂子の垢抜けた姿を見てはしゃいでいた。
桂子は、美奈代に言われるまま食事の盛り付けを手伝い、3人でテーブルについた。

あつしは、久しぶりの賑やかな食事が嬉しかった。
桂子も美奈代との故郷での思い出話しに夢中になっていた。
食事が終わり、食器の片付けを終えた美奈代が、買ってきた花火を取り出した。

それは線香花火だった。
３人で外に出て花火をした。

桂子が「私そろそろ・・」と言いかけたときには１０時だった。
すると美奈代が、「明日は日曜日だし桂子も一緒に飲み明かそうよ。夜道は危険だしさぁ」と、桂子を引きとめた。

すると、桂子は「そうだね。今夜は二人であっちゃんをとっちめてやろうか」と美奈代にウィンクした。

桂子と美奈代は、私の大学での生活ぶりを根堀歯堀聞き出した。
そして話しは将来の夢へと展開していった。

桂子は、デザイナーになることを夢見ていた。
短大を卒業したら、その道を進むことを改めて決意したように話していた。

そんな話しを、ニコニコしながら聞いていた美奈代は、「私は幸せなお嫁さんになりたい」とポツリと言った。

その顔は見たことがないほど愁いをおびていたのは気のせいだったのか…
あつしは思わず、「美奈代なら、なれるよ」そう言ってみた。

「ありがとう」美奈代はそう答えて「あっちゃんの夢は？」と聞き返した。

「もちろん、弁護士になることだよ」そう答えていた。

それから私は、本で読んだいろんな話しをした。

興味深そうに聞いていた美奈代は、いつしかテーブルに顔をつけてスヤスヤと寝息をたてていた。

桂子は「相変わらずね。美奈代は・・」と言いかけて「私も寝るわ」と美奈代の横に寝そべった。

いいちこの酔いがまわってきたのか、あつしもいつのまにか寝入ってしまった。

1章　雨宿り　4節

あつしは、美奈代が桂子を起こす声で目が覚めた。
テーブルの上には、３人分の目玉焼きとトーストが準備されていた。
美奈代の前には、牛乳の入ったコップが置いてあり、
私と桂子の前にはミッキーマウスとミニーマウスのペアカップが置いてあった。
その横にコーヒーの瓶と砂糖そして牛乳ビンが置いてあった。
桂子は黙って、コーヒーを作り始めた。
桂子はブラック、あつしのコーヒーには牛乳を少し、いれてくれた。
その光景を見ていた美奈代が、「今日はどしゃぶりだね」と、言った。
いつから降り始めたのだろうか。
外は雨だった。
あつしはＮＳＰのレコードをかけた。
なんとなく、気まずい雰囲気だったのだろう。
朝食を終え、美奈代は片付けを始めた。
桂子は、流し台近くの柱によりかかっていた。
そんな桂子に美奈代は「あっちで、ゆっくりしていていいよ」と語りかけていた。

桂子は黄色いクッションに寝そべり、ファッション雑誌を開いた。
片付け終えた美奈代は、荷物を整理し始めた。

そして、「桂ちゃん、あっちゃん、ありがとう。もう帰るね」と言った。
私は、「送っていくよ」と立ち上がったが、美奈代は「ドアまでで、いいよ。」と言った。

慌てて傘をだしたあつしに、「あっちゃん、もういいよ。ありがとう。楽しかった。」と、小さな声で言った。
美奈代と一緒に外に出た私には、「雨だれの音って悲しいね」と消え入るような声が聞えた。

その時、美奈代は雨の中を傘もささず一気に走り出した。
美奈代は立ち止まることも、振り向くこともせず、真っ直ぐに走って消えて行った。
あつしは追いかけることもできず、しばらくの間ドアにたたずんでいた。

それから先、美奈代からの連絡はなかった。
手紙も途絶え、新年を迎えた。

そして、桂子と美奈代は卒業を迎えた。
桂子はミュンヘンに、留学することが決まっていた。

3月も終わろうとする頃に、1枚の葉書きが届いた。
美奈代からだった。

そこには4月に結婚します。と書かれてあった。

あつしは軽いショックを受けた。

文章の終わりには、あつしの部屋の壁時計は、美奈代が桂子に贈ったものと同じで、びっくりしたこと。
そしてあつしの部屋のテーブルクロスが、桂子の好きなオレンジ色であり、黄色や暖色系でまとめられていたこと。
そして、桂子が使った歯ブラシは、洗面所に置いてあったものであったことから、全てを理解できたことが記されていた。

「みんな同じように幸せでありたいね。友達だから。」という文字は涙で滲んでいた。

あつしは、一人取り残されたような孤独感に見舞われていた。

訳もなくただ涙が溢れた。

それから2年の歳月が流れ、あつしも大学を卒業し社会人となった。

1章　雨宿り　4節（後書き）

文章中のアーチスト古いですね。
もっともこの小説を書いたのが、１０年前ですから、悪しからず。

2章　それぞれの道　1節

司法試験への道程はきびしかった。3度目の挑戦のときには仕事に追われ勉強などとても手につかない状態だった。

試験も終わり、仕事も一段落ついた夏に、あつしはむしょうに故郷に帰りたくなった。

考えてみれば故郷を後にしてからの8年間、両親が年に1度上京するだけで、あつしは成人式以来帰っていなかったのである。

成人式の日のことが脳裏によみがえってきた。

あの夏の日以来、奈美代からは何の連絡もなかった。

あつしから1度手紙を出したが返事はこなかった。

桂子に手紙を出すように言ったが、桂子も書けずにいたのだった。

あの夏のはじめに、あつしと桂子は一緒に暮らし始めていたのである。

桂子は、美奈代の親友だった。

ただ、お互いに故郷を離れ、都会という温もりのない環境の中で、渇いた空気に押し潰されそうになっていたのだろう。

そして、性への目覚めが、それに輪をかけたような状態だった。

美奈代の突然の出現で、私たちは「友情」そして「裏切り」の狭間で、一緒に暮らしていても、どこかぎこちなかった。

12月に入り、どちらからともなく正月の帰省話しがもちあがった。

どうやら桂子は、美奈代に電話連絡をいれていたらしい。
卒論を控え、テーマや研究で美奈子も忙しい日々を送っていた。
電話でも、美奈代はいつもと変わらない感じで、くったくなく話しを圭子とした。

それに安心したのか、桂子は成人式に出るといいだした。

美奈代は桂子ほどの美人ではないが、どこか肩の力を抜ける愛らしい笑顔の似合う子だった。
この数ヶ月、ケンカが絶えなかったせいも手伝ったのか、あつしは美奈子の顔が見たいと思った。

そして、クリスマスイヴに、桂子と一緒に帰省することにした。
故郷でクリスマスパーティができると、桂子ははしゃいでいた。

2章　それぞれの道　2節

クリスマスの夜、あつしの家は6人の友人でにぎわった。

あつしは一人っ子だったので、日頃寂しい思いをしていたのか、両親も加わり夜遅くまでにぎわっていた。

しかし、その中に美奈子の姿はなかった。

友人や両親にも、美奈代のことを聞きだせずにいた。

そうだ、夏に私がびっくりしたように成人式の日に美奈代を驚かせてやろうと、みんなに私が帰省していることは口止めした。

あっという間に大晦日になり、新年を迎えた。

成人式の朝、両親が準備してくれたスーツを着た。

なんとなくだが「いちご白書をもう一度」の歌詞が、浮かんできた記憶がある。

会場へ出向き私は美奈代の姿を探した。

着物姿の美奈代は少しやせて見えた。

美奈代に向かって手を上げてみせた。

美奈代はにっこり微笑んだだけで会場の中へと姿を消した。

式典の間、美奈子のことが気がかりだった。

美奈代は私と桂子のことに気づいているのだろうか。

そんなはずはない、と、考え長い退屈な時間が過ぎていくはずなのに、あつしは美奈代の姿を探すのに夢中だった。

桂子の話では、ふたりのことを話したことは無いという・・・。

でも、さっきの笑顔は美奈代のものではなかった。

夏休みの美奈代は、あつしの前から消えてしまった。

やはり、ふたりのことに気づいているのだろう。

そんなことを考えながら、美奈代の姿を探していた。

やがて式典も終わり、私は出口に向かう人の群にいた。

隣にいたはずの親友である孝一は、どこかに消えていた。

2章　それぞれの道　3節

ちょうど出口を出たところで、孝一の声が聞こえた。
「あつし～！こっちだよ。」
相変わらずでかい声だった。
人の波をかき分け、孝一の声の方に向かった。
人混みをすり抜けた先に、孝一を見つけた。
もう、そのときには美奈代のことを、忘れていた。
「わるい、わるい。人が多いからわかんなくなっちゃってさぁ・・・・・、！」と、言い訳をしようとするあつしの目に飛び込んできたのは、着物姿の美奈代だった。
「あっ！」
私は、言葉にならない声を発したまま、美奈代を見つめていた。
美奈代は笑顔を作っているのだが、どこかぎこちなさが感じられた。
着物を着ているせいか、夏に会った美奈代とは別人のようだ。
ふたりの様子を伺うように、孝一が話しかけてきた。
「おいおい、どうしちゃったんだよ。　あつし、美奈代がわかんないのかよ。　まぁ、孫にも衣装っていう言葉が、ハマっちゃってるのは確かだけど。」

「ひっど～い！」

美奈子が孝一に見せた顔は、夏の美奈子だった。

私はそんな美奈子を見つめながら、言葉を探していた。

そう、ありきたりの言葉しか浮かんでこなかったのである。

それでもなんとか、「ゲンキそうだな」と、声をかけた時、左腕をふいにひっぱられた。

びっくりして振り向くと佳子が立っていた。

「何してんのぉ・・？早く二次回に行こうよ・・！遅れちゃうよ」と、あつしと孝一をまくしたてた。

しかし美奈代は、あつしたちが見ている間に、父親が運転する車に乗り込んでいた。

窓越しに見えた美奈代は、悲しげにうつむいていた。

それが、学生時代最後の冬休みに見た、日本で見た美奈代の姿だった。

それから、美奈子に何通もの手紙を書いたが返事はなかった。

電話もかけてみたが、美奈代の声をきくこともできなかった。

3章　別離　1節

大学を卒業して4年目の冬の事だった。

あつしの幼友達である孝一から、ある日突然電話があった。

あつしは、今までなかなか受からない司法試験の勉強をしながら、弁護士事務所に助手として勤めていて、結構忙しかった。

孝一は大学を卒業してから彼が目標としていた大手ゼネコンに就職でき、エリートとしての道を歩んでいたと、そうあつしは聞いていたのだ。

孝一が入社したての1年目は張り切り目いっぱい仕事に打ち込み、そこそこの成果を上げていた。

2年目も難なく仕事をこなしていたが、3年目に入り孝一自信も油断が出来たのか、1つの小さなミスをし、商談がだめになったのだった。

その商談その物は大きな物ではなく、会社に多大な損失を与える物では無かったが、今までこれと言ったミスらしいミスをした事の無い孝一には、ショックだった。

そして、そのミスを取り戻そうと焦っていた。

そうする内に、またしても孝一も自分でも信じられない様な、簡単なミスをして、今度はお客を怒らせてしまった。

それからはまるでジェットコースターがスタートして、最高点に達し猛スピードで転がり落ちるかの様に、孝一の仕事ぶり次から次へと駄目になって行った。

仕事を与えられて、その仕事を今度こそはと頑張るのだが、かえって気負いばかりが先行して、終わってみれば散々な結果になって行った。

そしてとうとう、大きな商談を駄目にしてしまい、完全に立ち直れなくなっていた。

あつしに電話をしたのは、そんな年も押し迫った12月の事だった。

「あつし、俺、もうだめだ」

電話でそう言われたあつしは、何の事かさっぱり判らなかった。

「お前らしくも無く落ち込んだ声をだして、何かあったのかよ」

あつしは、そう訊いていたが、頭の中では今度の司法試験の事、そして今いる弁護士事務所の仕事の事でいっぱいだった。

孝一の事は、今まで仕事が順調に進んでいて『今、俺は幸せだぁ』と、言っていた位なので、今回の電話はさほど気にしていなかった。

「なんだよ、誰かに振られでもしたのかよ」と、あつしはからかい半分にそう言ったが、

孝一は、その言葉にまったく反応しなかった。

「もう、だめなんだ俺、もう何もかもやになった」と、かなり投げやりな言い方をした。

「そうか、それじゃあ久々に会って酒でも飲もうか」と、あつしが誘った。

「そうだな、・・・」と、孝一は何か躊躇していたが、構わずあつしは、

「それじゃあ、今度の金曜にでも俺んちで酒でも飲もうよ」

「うん・・・」力なく返事があって電話「うん・・・」と、力なく返事があってその電話は切れた。

その週の金曜日になりあつしは朝から仕事に追い回されるように忙しかった。

週末であった為、仕事を週内に片付けたいと言う思いも働いていた。

孝一との事を忘れていたのだが、なぜか時間内に帰りたいと言うよりも、時間内に仕事を終らせなければならないと言う、脅迫めいた観念もあった。

3章　別離　2節

5時になって大まかな仕事は片付けたので事務所のみんなに「お先に失礼します」と言って、事務所のドアノブに手を掛けたその時の事である。

事務所の電話が鳴り始めた。

不思議な事にあつしは、その電話が自分に架かってきた物だと直感した。

そして次の瞬間、孝一との約束を思い出した。

電話は、事務所の年配の先輩が取っていた。

あつしはノブから手を離し、電話を取った方を見ていた。

「織田、お前にだ、お前何かやらかしたんじゃあないだろうな。警察からだぞ」と言って、受話器をあつしの方に向けて差し出した。

「僕は司法試験をこれから受けようという身ですよ。そんな事有ってはならない事です」と、軽く受け流しながら、受話器を受け取りに行った。

「そうだな、お前は頑張ってるものなぁ」と、その年配の先輩は、受話器をあつしに手渡し、その手であつしの肩をぽんと軽く叩いた。

あつしが電話に出ると、電話の相手は「こちら〇〇署ですが、織田あつしさんですね」と、確認してきた。

「はい」と言う返事を待ってから相手は、「松井孝一さんを知っておられますか」と、尋ねてきた。

「はい、松井は僕と一緒に同じ田舎から、こちらに出てきていますが、その松井に何かあったのでしょうか」と、訊いた。

「本日午後４時半ごろ、所轄内でちょとしたいざこざがありまして、松井さんは酒に酔って路上でケンカになりそうになった所を、警邏中の署員に保護されました。」

「そうですか、それで彼は今どうしていますか」と、あつしが尋ねると、

「幸いケンカになった訳でもなく、本人もさほど酔っている風でもないので誰かに受け取りに来てもらわなくてはいけなく、誰か知り合いが居ないのかと本人に尋ねたところ、あなたの名前が出てきまして、こうして電話をしています」と、説明してくれた。

「それで、私が引き取りに行けばいい訳ですね」と、言うと。

「本人は、あなたに来て欲しいと希望しています」と、言う言葉を聴くか聞かない内に、

「それではすぐに参ります」と、言ってあつしは電話を切っていた。

「おい、大丈夫か」と、受話器を渡してくれた年配の先輩が、声を掛けてくれたが、その言葉に返事も返さず事務所を飛び出し、事務所を出た所で通りかかったタクシーを拾い、警察に向かった。

タクシーで警察署まで行き、玄関に入ろうとするが、やけに警察署の横の通りが騒がしく、人がたくさん集まっていたので、あつしはそちらの方が気になった。

あつしは、特に野次馬根性と言う物が旺盛ではないが、妙に気になり見に行く事にした。

行って見ると、解体工事中のビルの屋上で、誰かが生気の抜けたように空を見上げ、角の端にふらりと立っていた。

3章　別離　3節

よく見ると、それは孝一であった。

彼は、空の一点を見つめながら、何やらぶつぶつと言っているように見えた。

このままではいけないなと思い、とにかく孝一の所まで行って見る事にした。

そしてビルの方に行こうと、見上げたまま進んでいると、不意に誰かとぶつかった。

その男も上を見ていたらしく、驚いて振り返ったが、その男の視界からあつしは消えていた、あつしはぶつかった拍子に転んでしまっていたのだ。

あつしは転んだ拍子に足をひねったみたいで、起き上がろうとすると足首が少し痛かった。

何とか起き上がり相手の男を見ると、その男は小声で、「うるせぇや！」と、捨て台詞とも取れるような言葉を言いながら、まるであつしから逃げるように、人ごみの中に消えていった。

失礼なやつだ「ご免」とか何か、言葉は無いものかねと、思ったがすでに男の姿は人ごみの中に紛れていて、その言葉を相手に言うチャンスを逃してしまった。

何処かで会った様な気もするけど誰だったかなと、何となく不思議な思いを感じつつ、痛めた足を少し引きながら、そのビルの屋上に

たどりついた。

そこには数名の警官が、孝一から距離をおいて取り巻いていて、その中で一番の上司であろう人物が孝一に、

「おい思い直せよ、死ぬ事は何時でも出来るぞ。」と、なんだか死んでもいいような、死ぬのはよせと言っているような、訳の分からないことを口走っていた。

きっとあの人もパニクッてるのだなと、思いつつその人に、

「あのぅ、織田ですが。」と、言うと、

「ああよかった、来て頂いてありがとう。」などと、その場にそぐわない挨拶をされた。

その声は、事務所の電話で聞いた声の主に間違いなかった。

「あなたが私に電話を?」と、あつしが尋ねると。

「そうです。あの時話してる間、彼からちょっと目を離した隙に、ふらふらと署から出て行き、ここまで上がってきたんですよ。」と、言いながら、暑くも無いのにハンカチを取り出し、すまなそうな顔をそのハンカチで拭いた。

「ここに来てからは、ああしてずっと空を見上げて、時々訳のわからんことを言っています。もう我々にはどうして良いかさっぱりですわ。」と、いって孝一の方を顎でしゃくって見せた。

「そうですか、それじゃあ、僕が話して見ましょう。」と、いって前に出ようとしたその時、ちょっとした屋上のコンクリートのでこ

ぼこに、先程痛めた足を引っ掛けてしまった。

悪い事に、前のめりになりながら起き上がろうとするものだから、体は前方にいっそう加速され、一気に孝一の所まで突き進み、孝一に体当たりするような格好になった。

その衝撃でビルから孝一が落ちそうになったので、とっさにあつしが手を伸ばし、孝一を抱きかかえる格好になった。

しかし、二人の体は足がビルの端にかかりはしていたが、二人の体はすでに４５度以上傾いでいた。

そして下からは、「アー！」と、いう叫び声とも諦めの声ともつかない声が、いっせいに人々の口々から発せられた。

あつしも「しまった！」と、思ったが目を閉じ、もう成り行きに任せるしかなかった。

その時、目を閉じていても辺りが明るくなり、二人はビルの内側に倒れこんでいた。

目を閉じていたあつしは、自分たちがどうなったか分からなかったが、床にぶつかる軽い衝撃があった。

「イテ！」２０階から落ちると、このくらいの痛さですむのかなと、思っていたら、今度はまだ目を閉じているそのまぶたも通すような、赤い光線がまるで稲妻のようにあたりを照らした。

3章　別離　3節（後書き）

ちょっと、純文学とは離れた現象が起こってしまいましたが、これは、「青い蝶」を、読まれると納得されると思います。

3章　別離　4節

目をあけると、屋上にいた警官たちが自分たちは、なぜ自分たちは、ここにいるのだろうと、言うような顔をして、みな所在なげに突っ立っていた。

「おい、あつし、重いよ」と、先ほどから孝一の上になっていたあつしに、抗議の言葉が下から発せられた。

「いやすまん」と、いって一応離れはしたが、

「しかしお前大丈夫か」と、問い掛けると、

「それがな、さっきから空の上を何か飛んでるんだよ、その姿を追いかけてきただけなんだけどな」と、まったく頓着の無い返事が返ってきた。

あつしはとりあえず、孝一の方に注意を傾けつつも、先ほど電話してきたと思しき警官に

「大丈夫ようですが、一応署の方に行きましょうか」と、尋ねると、

「君たちは誰だね、私はここで何をしていたのかね」と、まるで記憶喪失者みたいなことを口走っていた。

そこであつしは、今までの事をかいつまんで話をして見たものの、まるで納得がいかないようでありはしたが、結局、警察官ともども署の方に行くことになった。

その頃、ビルの下では集まっていた人たちが上を指差し、

「アー、ＵＦＯだ！」と、騒いでいた。

空にはふらふらと、なんだか頼りなさそうに銀色の物体が浮遊していたが、まもなくすっと消えていった。

口々に、「今のなんだったんだろうね」などと、話しながら誰もが今までビルの屋上で起きていたことなど忘れ、思い思いの方向に散っていった。

警察署に孝一たちと行き、担当警察官の机の上にあった孝一に関する書類で警察官たちも納得し、書類を仕上げた後、二人は無事警察から出られることになった。

二人はとりあえず、あつしの部屋に行こうと言う事になり、タクシーを拾った。

車中であつしは、ちょっと考え込み暫く黙って腕組みをしていた。

沈黙を破ったのは、孝一の方だった。

「俺、見えたんだ・・・」と、ポツリと言った。

「えっ」と、何を言ったんだろうと、あつしは孝一の方を振り向いた。

あつしは、先ほどビルの下でぶつかった男の事を考えていた。

なぜかあの男の顔を見た時、青年だった頃の、なぜか思い出しては

いけない甘酸っぱい記憶が、甦った様な気がした。

それは、辛かった様な、とても幸せだったようなとても複雑な物だった。

しかし孝一は、あつしのそんな思いなどみじんも考えもせず、自分の話を続けた。

「見えたんだよ。何て言うのかな、俗に言うだろうＵＦＯって奴かな。警察に保護されてあつしが来てくれる間、ぼんやり窓の外を見ていたら、ぼんやり銀色の船体って言ったらいいのかな。丸い物が空中に浮いているのが見えたんだ」

「そうか」と、あつしはあまり真剣に取り合わなかったが、孝一は続けて話した。

「それを追いかけて外に出て行ったら、いつの間にかあのビルの屋上に居たんだよ」

「そういえばお前、人が見えない物を時々見えるって、よく昔から良く騒いでたよなぁ」と、あつしはいつもの孝一に接する時の笑顔に戻り、話を茶化しながら言った。

「うん、でも誰も信用してくれなかったよ。まあお前だけは話だけは付き合ってくれてたよな」と、孝一は、親指でちょっとあつしの方を指して、言った。

「そのＵＦＯみたいなのを、見ていて思ったんだけどな、俺、会社辞めて、アメリカに行って昔夢中になっていた時のように、また音楽をやろうと思う」と、突然言い始めた。

「えっ」と、今度は驚きの声を出してあつしは孝一を見たが、孝一は彼が物事をこうすると決めた時のいつもの顔になり、もうガンとして人の意見に翻弄はされないよと、言う態度になった。

あつしは孝一がこの顔と、態度を取った時は何を行っても聞かないことを知っていたので、また、タクシーがあつしの部屋に着くまで、今度は腕組みをして、考え込んでしまった。

3章　別離　5節

あつしの部屋に入ると、孝一は「なんか、懐かしい部屋だな」と、部屋の中を一通り見回した。

「そんなに珍しい物なんか置いてないよ」と、あつしが手のひらで、その辺にでも座れよとでも言うかの様なしぐさで、孝一を制した。

タクシーを降りてから、部屋に着くまで近くのコンビニで軽食や、酒、つまみを買ってきていた。

それを二人で袋からガサゴソとテーブルの上に出しながら、孝一がいきなり前置きなしに話し始めた。

「ほら俺たちが学生時代一緒にバンドをやっていたトムって奴いたじゃないか、アメリカから来た、カリフォルニアから来ていた奴」

「ああ、確かそんなのがいたな」と、あつしは突然学生時代の事を言われた事もあり、どんな奴だったか思い出そうと、缶ビールのフタを開けながら、目は宙を泳がせていた。

「そうそう、確か実家が日本で言うパブみたいな事をしてるとかで、小さい時から音楽ばかり聴いて育ったとかって言ってたな」

「そう、奴だよ。あいつが先日のメールでな」と、そこまで言うと、あつしが、

「お前たち、まだやりとりしてたのか」と、ちょっとびっくりした様に、孝一の顔を覗き込んだが、孝一も缶ビールのフタを空けなが

ら話を続けた。

「あいつ、国に帰ってバンドを作ったらしいんだが、最近ベースがメンバーから抜けたいと、言ってるって、そうメールでよこしてきたんだ」と、言って、缶ビールをぐいっと一口のみ、つまみをぱくりと一口、口に放り込んだ。

「そういえばお前、昔バンドやってた時ベースやってたな」と、あつしもビールとつまみを口に放り込みながら、モゴモゴとしゃべった。

「でっ、なっ！そのバンドに入るために、今の会社を辞めてアメリカに行こうと思ってたんだ」と、孝一は目を輝かしながら話した。

「しかしお前、今勤めてるような会社に入る事が、お前の夢だったんじゃあないのか」と、あつしが聞きなおすと、孝一はこの４年間、自分がうまく行かなかった事を、かいつまんで話して聞かせた。

そして、最近ではあせれば焦るほど、仕事がうまく行かなかった事を話した。

「それでもういいやと、思ったんだ。なんだか気ばかり焦っちまってな、今はもう一度、一から仕事をやり直す気にならないんだ」

「そうか、そんな事になってたんだ」と、あつしは孝一とは月に一度とは言わなくとも、ふた月に一度くらいは会っていた。

孝一の一番の親友だと自負していただけに、この孝一の変化に気が付かなかった自分を恥ずかしく思った。

もう孝一はこれからの事を決めているようだった。
その事も今からあつしが相談する余地が無い事がわかり、また友として寂しい気もした。
それに、今ここで孝一にとって、他に何か良い方法があるか、あつしには思い当たらなかった。

3章　別離　6節

ぼんやりこんなことを考えていたら、孝一は今までとはまったく別の話を始めた。

「お前、この部屋で、桂子と一緒に暮らしてたんだっけな」と、まるで感情を押し殺したかのように、そして、台本の台詞でも読むかのように淡々と、ぽつりと言った。

この時あつしは「はっ！」と、して悟った。

圭子が感じていたように孝一は桂子の事が本当は好きだったんだと。

桂子は以前一緒に暮らしていた時、冗談みたいに「こうちゃん、私の事好きなのかしら」と、あつしの顔を覗き込み『あなたはどうするの？』と、言う顔をした事があった。

あつしは、「そうなのか？」と、その時はあまり気にせず、話を聞き流していた。

だから今、あつしは孝一が何を言い出すのか、胸の奥がどきんとした。

桂子とは、別れて以来会っていなかった。今どこで何をしているのかさえ、あつしは知らないのである。

あつしはやっとの事で、のどの奥から声を絞り出すかのように「ああ」と、だけ言った。

「あいつ、桂子が、今何処で何やっているか、お前知ってるか」と、また単調な台詞を読むように問い掛けてきた。

「ん！俺が聞いた話では、フランスでデザインの為に、絵の勉強しているはずだけど、学生時代から絵の勉強をしにドイツに行くんだ、と、言ってたけれど、絵の方が先だとか言ってたからな」と、あつしは美奈代の結婚式以来、桂子とは会っていないので、それまで桂子から聞いていた事を、そのまま話した。

すると孝一は、「桂子の奴、今ドイツに居るよ」と、ポツリと独り言のように言った。

孝一もあつしも、そうほうが顔をまともに見てしゃべれなかった。孝一はあつしの方を見てしゃべると、何かとてつもなく感情が噴出してきそうで、孝一自身怖かったからである。

そして、あつしもまた何故か過去の悪をいじられているようで、孝一のほうを見ると何か自分でも思いもしない感情が起きそうなのが怖かった。

「本当はな、桂子のやつお前には黙っててくれって言ってたんだけど、俺がアメリカに行っちまうと、しばらくお前とこうやって顔を付き合わせて、話す機会がなくなっちまうからな。この際お前に話しとこうと思ってな」と、ちらりとあつしのほうを見て言った。

「そうか、それで彼女、まだ絵の勉強、してるのか」と、切れ切れに訊いた。

「さあ、そこまでは俺も知らないよ」と、言ってごろんと横にな

った。

「それよりかなぁ、俺久々にベース弾くけどうまくひけっかなぁ」と、さっきのバンドの話題に変えた。

そして、その話題や今までの二人の生活などを、久々に明け方まで話した。

3章　別離　6節（後書き）

この章の副題、結構悩みました。

4章　二人　1節

窓の外はシトシトと雨が降っていた。

その窓からは、向かい石造りの壁の建物、そして見下ろせば石畳の道路が見えていた。

ここはドイツ南東の方の片田舎、ミュンヘンの近くにあるアパートの一室でぼんやりと物思いにふけっていた。

それは四年前、日本からパリに出発する時、空港には孝一が見送りに来てくれていた時の事だった。

あつしとは、あの日美奈代が泊まりに来て以来、少しずつ二人の気持ちがずれていっていた。

そして、三ヶ月後には2人別々に暮らすようになっていた。

その後、あつしとは連絡を取っていなく、美奈代の結婚式の時は孝一も居たので明るく振舞って居たが、出発する時はあつしに連絡はしなかった。

孝一は二人の仲を知っていたが、空港でゲートに行くエスカレーターに乗る直前まで明るく世間話などしていて、足を乗せエスカレーターに乗り下に降り出した時、満面の笑みを桂子に送り、

一言「がんばってこいよ」と、言って送り出してくれただけで桂子もまた明るく笑顔で「うん、頑張ってくるね」と、手を上げ気持ちよく出発できた。

そして何より、孝一があつしの事に触れないようにしてくれていたのが判り、その孝一の心遣いにうれしかった。

桂子は大学を卒業してから、デザイナーになる為に絵の勉強をしようと、一度はパリに居たのだが、ある日パリからドイツに絵を書きに、この地方に来てからここが気に入ってしまい、とうとうここに住むようになったのだ。

この部屋に今、桂子ひとりだが、この部屋にはルームメイトが居て、そのルームメイトと共に借りている。

パリではあまり絵の事に集中して勉強できず、ふらりとドイツに絵を書きに来て、出会ったのが今のルームメイトのキャスリンだが、彼女は今、家庭の急用とかで母国アメリカに帰国中であった。

キャスリンはアメリカ、カリフォルニア州出身で、勝気で陽気な性格、と言うのが彼女を一言で表した性格で、いたってあっさりとした女の子だった。

彼女とはミュンヘンの湖の湖畔で知り合った。

4章　二人　2節

桂子がキャンパスのスタンドを立てたまま、デッサンを考えるでもなく、ぼんやりと湖の方を眺めていると、突然後ろから「グーテンダァー」と、挨拶してきたのである。

桂子は大学で、第二外国語はフランス語だったので、ドイツ語はほとんどだめだったが、かろうじてそれが「こんにちは」である事を知っていた。

桂子は英語で「ハロー」と答え、「ドイツ語はほとんどだめです。英語とフランス語なら話せます」と、あまり力の無い言い方で答えた。

キャスリンは目を大きく開け、「オー、ベリィナイス」と、大きく手をひろげ、今会ったばかりの桂子を抱きしめるかのように、手を広げながら寄ってきた。

「私はアメリカ人よ」と、彼女は英語で話し始めた。

「あなたは絵を書きに来たの？　でも、キャンパスは真っ白ね」と、キャンパスをのぞきこみながら話しかけてきた。

キャスリンは最近、音楽を習いにドイツに来たのだが、英語が話せる人が回りにあまりいなく、当然気楽なおしゃべりをしてくれる相手が居なかった。

英語が話せる相手だと判り、今までのうっぷんが吹き出てきたのだそうだ。

自分の事を一通り話すと、桂子をじっくり見て、「なんだか思いつめてる事でも、ありそうね」と、言って、持っていたバイオリンのケースからバイオリンを出し、そこでいきなり曲を弾き始めた。

その曲は「オーバー　ザ　レインボー」であった。

後に、なぜ、あの時あの曲を弾いたのか、桂子がキャスリンに聞いたところ。

「桂子の気持ちがこの現実に居なく、熱にうなされているアリスみたいだったからよ」との事だった。

そんな彼女が部屋に居るといつも話題が絶えなく、賑やかだった。

だから桂子は二人で居る時は今までのいやな事を忘れられて、時間がまるで止まったかのように思え、実際、何時間も彼女と話していることが多かった。

しかし、今日は一人だけでこの部屋に居て、部屋はシーンと静まり返っていた。

4章　二人　3節

パリに一年近く居て、ドイツに来て三年以上、パリに居た頃は何時もあつしや、孝一の事が頭から離れないで居た。

ここ、ミュンヘンに移り住んだのも、ドイツが良くなった訳ではなく、キャスリンが居たからだと、今ではそう思うようになっていた。

そのキャスリンは、アメリカにいるおじいさんの体調が悪くなったとかで、その様子を見に帰っている。

そのキャスリンから、昨日国際電話があった。

キャスリンがアメリカに帰っている間は、メールで連絡を取り合っていたが、よほどの急用で確実に伝えようとしたのだろう。

そうでなければ、わざわざ電話を掛けて来る事は無いはずだ。

しかし、桂子が電話に出ると、用件はいたって簡単で「明日帰る」と、言う事だけだった。

それともう一つ、『キャスリンの従兄弟のトムと、その友達で日本人の2人も一緒なの、一人は従兄弟の男友達で、もう一人はキャスリンの家の店で働いている女の子なの、日本の女の子だから桂子も話が合うと思うよ、だからよろしくね』、との事だった。

桂子にはなぜか『日本の子だから桂子も』と、言う所が、強調されていたように思えたが、あまり気留めなかった。

キャスリンの、いつもの茶目っ気が出たんだろうと、すぐに忘れてしまっていた。

窓を眺めていた桂子が「ふっ」っと、軽く息を吐き、窓際から離れ『キャスリンが迎えに来て欲しい』と言う駅に行く為の身支度を始めた。

身支度をしながら、この数日一人で居て部屋が静か過ぎて怖かったが、やっとキャスリンも帰って来るんだと安堵の気持ちになった。

しかし、一緒にくる3人は多分始めて会う人達だろうし、特に日本人の二人には、自分がどう接したら良いか戸惑っていた。

二人はカップルなのだろうか、私の前でいちゃつくのだろうかなどと、要らぬ心配までしていたが、そう思うと、今の桂子には気が重くなるのだった。

キャスリンは私の今の気持ちを知っている筈なのに、なぜその様な人達を連れて来ようとしているのかな、従兄弟のトムに断るに断りきれなかったのかな、でも、あのきっぱりとしたキャスリンの性格からしても断りきれなかったなんて考えられないし、などと考えている間に身支度も済み、桂子は部屋を出て駅に向かった。

4章　二人　4節（前書き）

ちょっと、時間さかのぼります

4章　二人　4節

それより四日前の事である。

ここはアメリカ、カリフォルニア州ロサンゼルスから山の方向かう幹線道路沿いで、少々ロサンゼルスから離れた所にある、小さな町の道路わきの、あるカフェでの事だった。

カフェはキャスリンの両親が経営していて、中には小さなステージもあり、ここで地元や地方の小さなバンドが時折演奏などをしている事もある。

そのカフェで、キャスリンが店のウエイターの女の子と、店のテーブルで話し込んでいた。

「あなたも日本人なの」と、キャスリンが尋ねていた。

昼の忙しい時間が過ぎ、客もまばらになっていた。

店は少し余裕が出来ていたので、キャスリンの両親も二人がテーブルで椅子に座り、話し込んでいるのを黙認していた。

これが忙しい時間帯なら、普段店に来て手伝おうとしたことも無いキャスリンに、両親はせめて店の邪魔はするなと強い口調でいい、椅子に座らせるどころか店から追い出していたところだろう。

今日は、一年ぶりにアメリカに帰ってきて、時間が少ないからと言って、病院に見舞いに行けない両親に、店までおじいさんの容態を知らせにきてくれた事もあり、両親は二人に自由に話をさせていた。

「あなたもって、私以外どこかに日本人がいるの」と、そのウエイターは聞き返した。

「私ね、今ドイツ居てルームメイトと二人で住んでるんだけど、そのルームメイトが日本人なのよ。その子は今ではずいぶん明るくなったんだけどね、3年前に始めてあった時は、今のあなたの様に、なんだか人生に疲れたって、そんな感じだったわ」

「そう」とウエイター

「それでやはり日本人なんでしょう」と、キャスリンは日本人の所をｊａｐａｎｅｓと言わず、ｎｉｈｏｎｎｊｉｎｎと、今度は日本語で尋ねた。

これにはウエイターも「まいったな」と、言う顔で「ええ、そうよ」と、軽く微笑んで応えた。

「あらまあ、この3年この子が少しでもにこりとした顔なんて見たこともないのに、やっぱり同年代の子同士がいいのかね」と、横からキャスリンの母親が口をはさんだ。

4章　二人　5節

「3年！」と、キャスリンは驚きの表情で言った。

「あなた、3年もここに居たの。私ぜんぜん知らなかったわ」と言うと、母親が、

「そりゃあそうだろうとも、ドイツから帰ったって家に帰るくらいで、店の方へ来た事も無いじゃないか、すぐにロスに行って、トムに会いに行ってるだけじゃあないか。店がどうなってるかなんてお前が知るわけ無いだろう。もっとも店に来て邪魔なんかしてもらってもこっちが困るけどね」と、カウンターやテーブルを拭きながら、母親がキャスリンに小言を言った。

「まあ、そりゃあそうだ」と、キャスリンは口の中でモゴモゴ言いながら、母親の方に向いていた顔を、ウエイターの方に向けた。

「あなた、名は何ていうの。わたしはキャスリン、苗字は知ってるわよね」と、言うと再び顔を母親の方に向けて、

「明日はロスに行ってくるね。いいでしょ、じいちゃんの容態もそんなに悪く無かったんだしさ」と、言った、と言うよりは、言い放っていた。

「戸田美奈代」と、ウエイターは横を向いているキャスリンにポツリと自分の名を言った。

「え！」と、キャスリンは「ｏｄａｍｉｎａｙｏって言った」と、聞きなおした。

ウエイターは「おだ」と言う所で、一瞬うろたえたような顔をしたが、

「いいえ、ｔｏｄａ、戸田美奈代よ」と、はっきり答えた。

そのウエイターは離婚直後、日本から逃げるようにアメリカに来ていた美奈代だった。

美奈代は、両親に勧められ一度は結婚したものの、ふとしたことから夫婦の間に亀裂が入り、半年で離婚した。

別れてから東京の知人の所に身を寄せていたが、その知人が仕事の都合でアメリカに行くことになり、そのまま美奈代も一緒にアメリカに来て、ここで働くようになった。

知人は一年ほどで日本に帰ったのだが、美奈代はキャスリンの両親とも馬が合うのか、二人に大事にされていた事もあり、この店の居心地がよくなり、以来、３年ここのウエイターとしてアメリカに居残っていたのだ。

今までの事をかいつまんでキャスリンに話すと、

「ああ、離婚のショックで、そんな暗い顔をしているのね」と、キャスリンがなるほどねと言う顔でうなずいた。

だが美奈代は、軽く頭を横に振り、

「そうじゃないの」と、軽く否定した。

4章　二人　6節

「本当はね、私には結婚前に心に思っていた人が居たの。でも、その人には他に好きな人が居たの。その事がわかった頃、両親から話しがありそのまま結婚したの。離婚してからその人の元に行こうと近くに住んでいたのだけれど、どうしても彼に会えなかった。」

「ふーん」と、キャスリンは一つうなずき、「私だったら飛んで行くんだけどなあ」と、つぶやいた。

それを聞いた美奈代は

「私もそうしたかった。でも以前彼は好きな人と一緒に住んでいて、その事を知らずに私が遊びに言った事があったの。翌日一緒に二人で住んでいる事が私には判ちゃって、その事がトラウマになっていたのね」と、美奈代は持て余した両手で手遊びしながら、その手を見ながら、ぼんやりとした口調で言った。

「そうかぁ」と、とりあえずキャスリンは納得した。

「ね、その彼の彼女、あなたの知っている人なの」と、ちょっと興味を感じて聞いてみた。

「ええ、幼友達よ」と、美奈代は簡潔に答えた。

「もうここまで聞いちゃったんだから、ついでといっちゃなんなんだけど、その彼の名前何ていうの、私が日本から連れてきてあげるから教えてくれる」と、言ったもののたちまち美奈代の目が大きく見開かれたのを見て、キャスリンはすぐさま、

「それは冗談よ、ちょっと名前が知りたかっただけ、私が知った所でどうなるって物でもないのにね」と、手をひろげて見せた。

しかし美奈代は「あつし、織田あつし」と、キャスリンに聞こえるか聞こえないかの声で、ぽつりと言った。

その名を言って、美奈代は立ち上がり、

「仕事に戻らなくっちゃ、ありがとう何か問題が解決したわけでもないんだけれど、久々に昔の事を話せて少し気が楽になったわ」と、手を振り、カウンターの方へ自分の仕事を続ける為に戻って行った。

キャスリンは軽く手を上げ、目で追いながら日本では恋愛パターンってみんな同じなのかなと、思っていた。

なんだか桂子の昔の彼を、美奈代の彼に当てはめるとぴったり話が収まるわよねと、思った。

当然キャスリンはこの時、美奈代と桂子が幼友達で、まさに双方の彼が織田あつしで、三角関係にあったなど思いもよらなかった。

桂子からは大体の様子は聞いていたが、彼の名前までは聴いたことが無かったからだ。

何度か聞こうとした事はあったが、その度に桂子に聞いても仕方の無い事でしょうと、軽くあしらわれいたし、深く追及をし二人の関係がギクシャクなりたくは無かったので、キャスリンもその通りだと思っていたのでのであった。

しかし、翌日キャスリンはロサンジェルスでその考えを、変えざるをえなくなったのであった。

5章　ドイツへ　1節

雨の空を見上げあつしは、「また雨か・・・」と、つぶやき。雨にぬれながら涙橋を通り、帰路についていた。

今年の司法試験に無事受かり、司法修習生となり、前期修習もそろそろ終ろうとしていた。

修習生になり法を学べば学ぶほど。法は機械的でそれを使う人間によって、法に心が宿る事があつしに判ってきた。

その法を使う上で清い心を保とうと、普段はバスでアパートに帰るのだが、今日は駅からのアパートへの帰りは歩いて帰っていた。

ここを通ると、学生時代のまっすぐな澄んだ心になれる様に思うのだが、涙橋を過ぎて見えてくる喫茶店のカウベルが「カラーン」と鳴ると、やはりあの日の事を思い出し、あの日が終わりの始まりだったなどと、胸がキュンとなった。

でも、この店もまだやっていると思うと、何故か安心したりもした。

大学時代から住んでいるアパートはこの先にある。

小雨の中を濡れながらのんびりとアパートに帰って行った。

アパートの部屋に帰って着替えをしていると、電話がなり始めた。

最近アパートの自室に居る事はめったに無かったので、あつしは誰からの電話だろうと、いぶかしがりながら受話器を取ると、それ

はアメリカからの国際電話で孝一からのものだった。

電話に出るなり孝一はいきなり、

「あつし、ドイツだ。ドイツにサッカー見に行こうぜ、ほら、ワールドカップで日本が決勝トーナメントに出るだろう。最初の一戦目のチケットが手に入ったんだぜ、すごいだろう」と、一方的に喋った。

その喋り口調は、あつしから拒否する権利を一切奪い取っていた。

「で、いつなんだその試合」と、あつしはどうせ「いやだ」と、言わせないだろと腹をくくり日程を聞いてみた。

答えは「五日後。ミュヘンでの試合だからな、せめて一日前には来て積もる話でもトムと一緒にしようぜ」との事だった。

場所はミュヘン駅で待ち合わせ、と、言う事になった。

幸いパスポートも持っていたし、ワールドカップの出場国の国民であればドイツに無条件で入国できる。

「わかった、じゃあ行くよ」と、あつしが告げると、孝一は「それじゃあ詳しい事は、又ドイツに居るアメリカの知人と、話をして連絡をするよ」と、言った。

5章　ドイツへ　2節

「いつ、お前にドイツの知り合いなんか出来たんだ」と、あつしが聞きなおすと、

「ああ、トムの従妹がドイツのミュンヘンに住んでいるのさ」と、さらりと言った。

「そうか、それは又いい偶然だな」と、あつしが言い、「じゃあ又連絡くれよ」と、言って受話器を置いた。

切れた電話の受話器を持ったまま、孝一は冷や汗をかいていた。

もう少しでドイツに住んでいる、桂子の話を自分の喉の奥まで出掛かっていたからだ。

今回、あつしをドイツに行こうと誘おうと考え始めたのは、４時間前トムに会いに来たトムの従妹キャスリンの話を聞いてからだった。

キャスリンに会うのは今回、初めてだったがトムから話を聞いていたので、おおよその気性は聞いていた。

しかしトムの話以上にキャスリンは陽気で、よく何でも話す女性だった。

来ていきなりトムに「ねえ、聞いてよ」と、初対面の孝一に挨拶もせずに話し始めた。

トムが「おい、俺が俺の友人くらい紹介してから世間話にしろよ」と、キャスリンをとがめられたので、キャスリンはやっと幸一の方を向くと、これまたいきなり「あら、あなたも日本人なの」と、孝一にそう言った。

「おいおい、初対面の人に対してそれは失礼だろう」と、又キャスリンをたしなめた。

「確かに彼は、俺が日本へ留学中にバンドを一緒にやっていた日本人で、松井孝一って言うんだ」と、正式にキャスリンに紹介した。

「そうねトムには日本の知り合いがいても、一向に不思議じゃあない訳よね」と、トムに言ってから孝一に向き、

「私はキャスリンよ、よろしくね。どうせ私の事はこのトーマス、トムから聞いてるんじゃあないのかしら、ろくな事じゃあないと思うけど…」と言いながら、孝一に手を差し出し握手をした。

孝一は何か言い掛けたが、一瞬早くキャスリンが、

「私の周りに、日本人がいっぱい居るのよ」と、トムに向かって話し始めた。

トムは孝一に向かって、すまんなと、言うように肩をすぼめ目配せした。

孝一もちょっと手を上げ、まあいいさと、言う感じの合図を送った。

「なんだよ、お前ドイツに住んでるんだから、周りはドイツ人だ

らけだろう」と、トムが茶化した。

「そうじゃなくて、確かにドイツで町に出れば周りはドイツ人だらけよ。でもいつか言ったでしょ、私のルームメイトの事」と、トムにちょっと突っかかるように言った。

5章　ドイツへ　3節

「ん、誰だっけ」と、トムはキャスリンに聞いていた事を覚えていない、と言った風に、言った。

「忘れてるんだ。私の言う事なんかこれぽっちも覚えてないんだから、ほら、ケイって日本の女の子よ」と、キャスリンは、今ドイツで一緒に暮らしている桂子の事を「ケイ」と、呼んだ。

キャスリンはアルファベットの「K」と発音が同じだったので、そばで聞いていた孝一には、桂子を連想させなかったばかりでなく、桂子の事すら頭に浮かばなかった。

「ああ、そうだっけ、けど、それだけじゃあ、いっぱいとは言わないだろう」と、トムが返すと、

「それがさあ、昨日久々に家の店に行ったらね、そこのウエイターがまたまた日本の女の子だったのよ。確かね美奈代とか言う女の子だったわ」と、キャスリンが言った時である。

所在もなく、ただ何となく二人の話を聞いていた孝一が、

「え！」と、驚いた声をいきなり出した。

そして自然に口が動き「とだみなよ」と、言っていた。

今度はキャスリンが驚いて、

「私、今、彼女のフルネーム言ったかしら、なのに貴方はなぜ彼女のフルネーム知っているの」と、孝一に聞いた。

孝一は再び、えっ！と言う顔になり、
「美奈代なんだ、その店にいるのは美奈代なんだね」と、二度名を言いキャスリンに詰め寄った。

キャスリンは、たじろきながら、「ええ、確かに戸田美奈代と名乗ったわ」と、うなずいた。

「なにがどうなんったんだ」と、トムが言ったものだから、キャスリンは孝一とトムに、昨日店で美奈代と話した内容を事細かく話した。

話を聞いて孝一は、四年前から所在が知れなかった美奈代だと確信した。

「あ、そうそう店を出る時、次にアメリカに帰った時、彼女が居るかどうか判らないと思ったから、記念にデジカメで彼女の写真を取っておいたの」と、デジカメを取り出し美奈代の写真を出そうと次々と画像を見ていっていた時の事だった。

デジカメの画面に、次々と出て来る写真の中に、ミュヘンの自室で桂子を撮った画像が出てきた。

その瞬間、一緒にデジカメを覗き込んでいた孝一とトムが同時に「桂子！」と、叫んでいた。

キャスリンは画像を検索するボタンから手を離し、孝一とトムの顔を代わる代わる見て、「どう言う事なの。何で二人とも桂子を知っているの」と、トムに聞いた。

5章　ドイツへ　4節

トムはちらりと、孝一の方を向いた。
孝一は無言でどうぞと、言う風に手の平をキャスリンの方に向けた。

トムがキャスリンの方を向くと修羅のような、いや修羅の一歩手前の顔をした、キャスリンの顔がそこにあり、そして、

「まさかあんたが桂子の昔の相手だったんじゃあないんでしょうね」と、先制し、さらに、
「桂子は5年前に三角関係みたいになって、男と別れたと行っていたわよ。ちょうどその頃日本に居たわよね」と、すごい顔でトムの顔を睨んでいた。

あまりの迫力に、トムは出かかった言葉がまた胸の中に入って行ってしまい、口ごもってしまった。

そこに孝一が二人の間に割って入り、キャスリンに5年前の事を、話し始めた。

「キャスリン。桂子は俺の友達のあつしって奴と付き合っていたんだ」と、言うとキャスリンは「織田あつしなの」と、意外にもキャスリンの口からあつしのフルネームが出てきた。

孝一は「ああ、ああ、そうだよ」と、何でと言う顔で、少々混乱してきた頭で返事をした。

「ちょっと待った。少し整理してみようか」と、孝一自身混乱し

てきたので、自分にも言い聞かせるように言った。

「そうね、何がどうなってるのか私も知りたいわ。孝一が一番何もかも知っていそうだから話して頂戴」と、キャスリンが孝一に向かって言った。

「俺だって少し位知ってらあ」と、トムはすねる様に言ったが、それにはキャスリンは見向きもしなかった。

「どこから話そうか、そうだな、俺の生まれは日本で・・」と、言いかけて頭をかきながら、

「何言ってんだろうな、そんな当たり前の事だったな」と、一呼吸入れてから、今度は落ち着いて、

「俺とさっき名前が出た三人、織田あつし、戸田美奈代、そして桂子の三人とは幼なじみで、高校を出るまでは一緒の学校にいたんだ。　違ってきたのは大学に進学してからで、美奈代だけが故郷に残ったんだ」と、

この十年間、四人に何があったのか、桂子がフランスに旅立った事、美奈代が離婚後皆の前から居なくなった事、孝一が思い出せられる事を二人に話した。

そこまで黙って聞いていたキャスリンは、

「ところであなたのイニシャルはCではなくて、Kになるのよね」と、今までの話とは関係の無いような事を孝一に聞いてきた。

5章　ドイツへ　5節

「確かにKだけど、それが何か関係あるの」と、孝一が聞き返すと、

「桂子はね、一緒に住み始めた頃、私が『ケイ』って呼ぶの、すごく嫌がっていたのよ。何でって幾ら聞いても、とにかく、今はそう呼ばれるの嫌だって言っていたの。だけど2年くらいたった頃だったかな、特に、何があったと言うわけでもないだけれどね、私が嫌がろうと呼び続けていたら、彼女も拒否するのを諦めたみたい。私には何かもう吹っ切ろうと言う感じがしたの。私がそう呼ぶのをやめること以上に、何かもっと大事な事を諦めたって感じだったわ。そして私に聞こえるかどうか判らないような声で一度きりだけど、だって「ケイ」って呼ばれると思い出すのよと、ね！」と、言って意味ありげに孝一の方を見た。

横で聞いていたトムが、「それって、幸一の事だったのか」と、キャスリンに聞いたが、

「私には判らない、ただ、Kって付くの四人の中で孝一だけよね、まあ桂子本人も、Kだけど、本人だとどう呼ぼうがケイだし、私は違うと思うんだけど」と、どうなのよと言いたげな顔をして孝一の顔を半分睨み顔で見た。

「だからって、なぜ俺なんだ。まあ俺も桂子がどうしているか気にはなっていたし、あの時だって・・・」と、何か思い出したように話すのを止めて、口ごもってしまった。

つかさずキャスリンは、

「なに、何があったの」と、興味津々と言った顔で孝一に続きを促がした。

「いや、フランスに旅立つ時、俺だけが彼女を見送ったんだけど、その時の彼女の顔が忘れられないんだ。何て言ったらいいか、すごくさみしそうだった」

「なんだ、サインはちゃんと出てたんだ」と、孝一の言葉を聞いてキャスリンはそうなんだと、したり顔でそう答えた。

「孝一は、桂子の事どう思っているの、ひょっとして俺の事なんか何にも思ってなんかいない。なんて思ってるんでしょうね」

「あ、うん」と、孝一は心の中を見透かされたような感じがして、歯切れの悪い返事をした。

「だから、男ってだめなのよね」と、トムの方を見て言った。

「俺の方に振るなよ」と、トムは言ってから、「お前に桂子の気持ち分かるのか」と、キャスリンに言った。

5章　ドイツへ　6節（前書き）

この辺り、長台詞が有り過ぎて、ちょっと読みづらいかもしれませんが、がまんしてください

5章　ドイツへ　6節

「私の感だけどね、多分、桂子は孝一が追って来てくれる事を、以前待ってたんだわ。今はただ生きているって感じの生活しているみたい、楽しいと思う時は確かに、にこやかにしているし、面白くない時は憮然としている。でも、そこには何か彼女が生きているってあまり感じないの。ゾンビとかそんな気味の悪い意味ではなくて、ただ生物が反応している、ってそう感じる事があるの」と、最近の桂子を見ていて思った事を言った。

そして、「あなた、桂子に会いに行くべきだわ」と、孝一の顔を見てそう言った。

「俺もそう思う」と、トムはジャケットの内ポケットから4枚のチケットを出して、そう言った。

そのチケットは、今キャスリンが住んでいるミュヘンで行われる、日本チームの試合の物だった。

「えっ、何これ」と、キャスリンは手にとって驚いた。それは彼女がサッカー好きで、ワールドカップのチケットがあったからではなかった。

むしろキャスリンは、サッカーにあまり興味が無かった。

「トムがドイツに来るの。でもなんで4枚なの」と、キャスリンは少しいぶかった。

「4枚必要だろう。だってここに3人で、ドイツにお前のルーム

メイトが居るだろう」と、平然と言ってのけた。

「だって、さっき私のルームメイトの事すっかり忘れてたくせに・・・」と、キャスリンは睨んでいたが、「さっきの嘘だったのね」と、ちょっと悪戯っぽい顔でトムを見た。

トムとしては、本当はもっと驚かそうと思っていたのだが、少々タイミングを外したのと、話しの成り行きで、驚かし損ねてしまった。

「俺は・・・」と言って、孝一はトムとキャスリンのそんな思いをよそに、他の事を考えていた。

「俺だけ会う訳にはいかない。あつしと、美奈代も一緒に会うように出来ないかな。多分あつしも美奈代も、お互い逢いたがっていると思うんだ。一緒にドイツで会うように出来ないだろうか」と、二人に言った。

「でも、あなたなぜそこまでするの、あなた自分の事が大事じゃあないの」と、キャスリンは不思議がってそう聞いた。

「俺たちは」と、ここで一旦止め、軽く息を整え、「どこまで行っても、幼友達でいたいんだ」と、他に言葉も見つからず、二人にすがるような目を向けた。

しかし、孝一はこの言葉が今の正直な気持ちで、なぜだか今回すぐ近くに居る美奈代を、ここにこのまま置いて、自分だけドイツの桂子に逢いに行く事は、あつしに対しても裏切るような気がしていた。

5章　ドイツへ　7節

「そう、じゃあみんなでドイツに行きましょう。なんだか楽しみになってきたわね」と、キャスリンはわくわくしてきていた。

「お前、やけに楽しそうだな」と、トムがキャスリンを見てそう言うと、

「だって、人が幸せになるのを手伝うって、楽しい事じゃない」と、自分が幸せになるかのように、楽しそうにそう言った。

「まあ、そういうお前が好きなんだけどな」と、トムはキャスリンに聞こえない位の小さい声でつぶやいた。

それから三人は、どうすればうまく、みんながドイツに集まるようになるのか、話し合ってみた。

美奈代は、孝一がアメリカに居て、アメリカからドイツまで一緒に行くとは考えにくく、孝一が居ると判れば再び姿を消すかもしれなかった。

そこで、キャスリンと二人だけでドイツに行くように思わせ、ミュンヘンまでは孝一たちとは別行動で行く事にした。

あつしには、孝一がドイツのサッカー観戦しようと、有無を言わせず返事をさせ呼び出す事にした。

桂子には、キャスリンがアメリカから客が一緒にミュンヘンまで来る、とだけ伝えておいて、誰が行くか伝えない事にした。

そして、ミュンヘン駅に着いた時、迎えに来るようにと、国際電話で伝えたのだった。

6章　そしてドイツ　1節

「なんだ、ドイツでも雨が降るのか」と、タラップを雨に濡れながら下りている孝一がそう言うと、

「そりゃ、そうさ、地球上で雨の降らない所なんてあるもんか」と、先にタラップを降りていたトムが軽くそう返した。

孝一とトムは、ロサンジェルスからドイツに渡ったのでは無く、美奈代と遭遇するのを極力避けるため、一旦サンフランシスコまで行き、そこからドイツに渡ったのだった。

実際には、ほぼ同時刻にベルリンに到着しているので、ここで出会う可能性があるわけだが、たとえ美奈代の視界に二人が入ったとしても、今の孝一は美奈代に孝一だとは分からなかっただろう。

それは、いかにもアメリカ人の様にカウボーイハットを被り、濃い目のサングラスを掛け、皮のジャンパーを着ていた。

当の美奈代達も、別の飛行機からやはり雨に濡れながらタラップを降りていた。

美奈代は最初の一粒の雨に打たれた瞬間、ふとあの夏のあつしがこぐ、自転車の後ろで歌を歌ったあの日の事を思い出していた。

そしてぼんやり上を見上げていると、前を下りていたキャスリンに、

「何考えているのよ、まるで昔の恋人でも思い出しているかのよ

うよ」と、下から顔をまともに見られ、そう言われた。

「まあ、私そんな顔していた」と、美奈代は正にその通りの事を言われて、内心どきりとしたが、出来るだけ平静を装い、そう言った。

キャスリンは当てずっぽうで言ったのだが、これから美奈代の昔の恋人に、自分たちが逢わせようと計画している事を、美奈代に気づかれていない事を願っていた。

しかし、美奈代が本当にあつしの事を思っているなど、思いもよらなかっただろう、もっとも美奈代も一時的な感傷に過ぎないと、本人もそう感じていただけだったのだが…

キャスリンは「ねえ、久々にベルリンからミュヘンまで列車で行きたいんだけど、いいでしょ」と、アメリカを出る時に、美奈代に一方的に宣言していたので、飛行機から降り、ターミナルを出て、ベルリンの駅に向かった。

ターミナルに入った孝一たちは、美奈代たちがミュンヘンに着く前にミュンヘンに行き、キャスリンたちのアパートに行きたかったので、そのまま入国手続きを済ませて空港を出ず、ドイツの国内線のターミナルに向かった。

6章　そしてドイツ　2節

その頃あつしはまだ機上の人で、ベルリンに着くまで二時間ほどあった。

あつしは機内で、「ヨーロッパか、なんて遠いんだろうな」と、ぼんやり考えていた。

すでにあつしは、十時間近く航空機に乗り継いできたので、そろそろ空ばかり見るのにうんざりしてきていた。

「ああ、しかし桂子は確かパリに居るって言ってよな。今回、会いに行って見ようか。でも今更、会いに行くのもなあ」などと、思っていた。

しかしドイツに着くと桂子どころか、あつしにとってもっと驚く人に逢えるとは、この時夢にも思ってもいなかった。

先に飛行機でミュヘンに着いた孝一たちは、6人全て集合する場所はミュンヘン駅にしようと、キャスリンと決めていたが、それよりも先に今キャスリンと、桂子が住んでいるアパートへ向かう事にした。

孝一は、理由が自分でもはっきり分からなかったが、とにかく桂子が住んでいるアパートを一刻でも早く見てみておきたかったのだ。

空港を出て、バスを待っていると孝一の携帯電話が鳴り始めた。

それはベルリンに着いた、あつしからだった。

「あっ、俺、あつし」
「ああ、あつしかこっちは少し雨が降っているぞ」と、孝一が言うと、

「そうかやっぱりか」と、少し笑い声であつしが言った。

「何が、可笑しいんだよ、人が雨に濡れてりゃあ良いってのかよ」と、孝一が少し不満そうな口振りで言うと、

「いや、そうじゃないさ。さっき列車のチケットを買う時、窓口の奴がな、こちらが聞きもしないのに、ミュヘンは雨ですよって、言ってたんだけど、嘘は言ってなかったなと、ふと思ったからさ、ちょっと可笑しくなったんだ。だからお前が雨に濡れてりゃ良いなんて、これっぽっちも思っちゃいないさ」と、わざとふざけたような口調で言った。

「そうか、まあいいや」と、孝一はあまり気にせず話を続けた。

「それより、お前ＩＣＥでミュンヘンまで来るんだよな。」と、とりあえずあつしの行動の確認をしておいた。

「ああ、ドイツを車窓から眺めさせてもらうよ。それにドイツの新幹線ってのも興味があったしな」と、列車でミュンヘンまで行く事を伝えた。

6章　そしてドイツ　3節

「そしたら前にも言ったけど、ミュンヘン駅で落ち合う事にしよう。列車が駅に着いたらホームから駅のコンコースに出る所に大きな売店がある、そうだな日本で言うキオスクみたいなやつだな。その前でって言う事にしよう」と、孝一は待ち合わせの場所を決めた。

「ああそれは良いけれど、それ分かりやすいんだろうな」と、あつしが聞くので、

「ああ、すぐ分かるさホームに降りて屋根のある方に歩いて行けばすぐ分かるさ」と、孝一は言って、さらに、

「お前、今ベルリンりんだよな。後3時間くらいでミュンヘンに到着だよな」と、時間を聞いた。

「ああ予定ではその位だな」と、あつしの返事を聞くと、

「それじゃあ待ってるぜ」と、孝一は一方的に電話を切ってしまった。

あまり長く話していると、余計な事まで喋りそうになるので、短めに切り上げたのだが、あつしはちょっとけげんだった。

「なんだよ、自分だけ必要な事言って、さっさと切りやがった。もう少し愛想良く話せよ」と、通話が切れた携帯電話に向かって、そうつぶやいていた。

孝一たちはあつしの事は置いておいて、とりあえず予定通り、バスに乗り桂子たちが住んでいるアパートに向かう事にした。

空港からアパートは1時間くらいのところで、そこからミュンヘン駅に向かえばたぶん丁度あつしや、美奈代たちがミュンヘン駅に到着する頃になる予定でいた。

バスを降り、もうすぐ、二人が住んでいるアパートらしき建物が、見えてきた時である。

そのアパートから、一人の女性が出てくるのを孝一たちは見た。

それは孝一がいつも心の中にあった、そう、まごう事ない桂子の姿だった。

あまりのも唐突に、桂子がアパートから出てきたもので、まったく予期していなかった孝一は幻でも見ているのかと思い、一瞬ぽかんとそこに立ち尽くしてしまった。

6章　そしてドイツ　4節

そんな孝一を見てトムは小声で、
「おい、孝一。今見つかっちまうぞ」と、孝一のわき腹を突付いた。
それで孝一は、我に返りあわててアパートに背を向けた。

その時、桂子との距離は十数メートルまで近づいていたが、今の孝一はアメリカンな恰好だったが、日本に居た時のようなスーツ姿なら、簡単に桂子に見つかっていただろう。

孝一と、トムはそのまま今来た道をひっくり返し、駅の方に歩いて行く事にした。その十メートルくらい後を、桂子も駅に向かって歩いていた。

桂子は前を歩いているちょっと大柄な白人と、東洋人が居るのは判って居たが、それが孝一とトムであろうなどとは、まったく思っていなかった。

それよりも、キャスリンが今日連れてくるという、二人の方が気に掛かっていた。

今もその事に思いをめぐらしていたので、アパートの前で突然きびすを返した二人の事など、関心が無く、孝一達が心配するほどのものでもなかった。

二人と一人が、それぞれミュンヘン駅に向かってバスに乗り込み、そして駅でバスを降りた。

相変わらず孝一とトムが前を歩いていた。

桂子はふと歌声を聞いた。

よく聞き耳を立てて聞いてみると、それは学生時代よく聞いて、慣れ親しんでいたメロディでもあったし良く聞いていた声でもあった。

それは、あつしや孝一たちが組んでいた音楽ユニットで、よく彼らが練習前に歌っていた、その曲だった。

不思議に今の圭子は、なぜかそれを、違和感無く聞き流していたのだった。

『あれは、何て曲名だったかしら』と、記憶を探りながら、そしてその歌声のする方をよく見ようとした。

それは、アパートを出てから常に前を行っていた、二人組みから聞こえて来ていた。

『ああそうだ、あれはビートルズのイエローサブマリンって、言ったかしら』と、桂子が思い出したその時、歌声が途切れ、先程まで前を行っていた二人の姿が、見えなくなってしまった。

6章　そしてドイツ　4節（後書き）

この辺り、文章が交錯してて、解り難いかと思いますが、ご勘弁を

…

6章　そしてドイツ　5節

孝一はバスを降りると、何故か昔ユニットでよく練習していた歌を歌いたくなった。

それは孝一が緊張したり、興奮したりした時、平常心を取り戻す時によく歌っていた曲だった。

「なあ、トム、『イエローサブマリン』って覚えてるかい」と、突然言い出した。

「ああ、覚えてるがどうした」

「急に歌いたくなったんだ。行くぞ」と、言って「1，2，3」と、リズムを取って歌いだした。

「ばかやろう、桂子に見つかっちまうだろうが」と、言ったが、「もうすぐ駅に着くさ、俺はもう我慢が出来なくなったんだ。あの角で、一旦身を隠して桂子を待つ事にするよ」

「そうか、まあお前がそう言うならそうしようか」と、トムも孝一のリズムに合わせ歌いだした。

そして、角を曲がった所で、小声で歌いながら、二人で圭子が来るのを待つことにした。

桂子は、懐かしい歌で昔を思い出し、甘酸っぱい少女の気分になっていたのに、歌声が消え少しがっかりした。

もう少しで駅の入り口だという所で、突然角からひょっこり一人の男性が現れた。

その顔は、確かに見覚えのある顔だったが、あまりにも突然で、しかもミュンヘンに居よう筈の無い人物だったので、思わず、

「アラ！ごめんなさい」と、本当は、孝一の方が行く手を阻んだのに、まるで圭子の方が行く手を阻んだように謝っていた。

そして、頭の中では『ああ、孝一だ』と、思いながらも、体の方は勝手に孝一の横をすり抜けようとしていた。

桂子は自分に今何が起きているのか、混乱していた。

孝一は桂子の前に出て、『まあ。孝一』とか、単純に『こういち！』と、叫んでくれると思っていたが、桂子が思わぬ動きをしたので、横をすり抜けようとした桂子の腕をしっかりとつかんだ。

そして、

「俺は、なんて馬鹿なんだろう。その後悔の念を今、やっと晴らせる時が来たというのに、また愛しい人が横をすり抜けようとしているのを、手を差し伸べずに過ごす所だった」と、桂子を引き寄せながら顔を覗きむように、言った。

6章　そしてドイツ　6節

桂子は、まだ何が起きてるのか、理解できずにいた。

そして、何かを確かめるように、まるで盲目の人が相手の顔を確かめるようなしぐさで、孝一の顔を掌で、ひたいの辺りから徐々に眉、目、鼻となぞっていった。

その様子を横で見ていたトムは、『まるで恋人同士のような優しい動きだな』と、思った。

桂子の手が孝一の口の所まで来た時だった。

桂子が思わず、「私は白昼夢を見てるのね。居てくれたら良いと思う人が、愛しいと、言ってくれた。夢なら、覚めなければ良いのに」と、ポツリとつぶやいた。

孝一はしっかりと、

「夢なんかじゃあないさ。俺はここにいる」と、言った。

桂子は触れていた口から言葉が出てきて、「はっ」と、して思わず手を引き、つかまれている孝一の手から逃れようとしたが、すでに孝一の両手は桂子の両肩をしっかりつかんでいた。

「もう離さない」と、一言、言って孝一は桂子を抱き寄せ、そして抱きしめようとしたが、桂子はそれを拒んだ。

「私は、貴方の心を傷つけ、あげくに逃げたのよ。今さら貴方に受け止めてもらえるような女じゃあ無いわ」と、孝一から離れようと

力なくもがいた。

「それじゃ、何時まで待てば良いんだ。一年後か、三年後かそれとも十年後か、そんなの何時になっても、もう今の俺には関係ないんだ。今が、そしてこれからが大事なんだ。過去じゃあない」と、桂子の肩を揺さぶり叫ぶような勢いになっていた。

「じゃあ、貴方は、わたしを、許せるの」と、桂子は真剣な顔で、一言一言、言葉を切って、挑む様に孝一の顔を覗き込みそう尋ねた。

「もともと、俺は傷ついてなんか居ない。あつしといた時だって、俺はお前が幸せならそれで良いと思っていた。しかしその事の方がお前を傷つけていたんじゃあないかと、今ではそう思ってる。だから、許して欲しいのは俺の方だ」と、孝一は落ち着きを取り戻し、そう答えた。

「本当に、そう思ってるの」と、桂子が尋ねた。

「ああ」と、孝一が言うと、桂子の全身から力が抜けたように幸一の胸に身を投げ出してきた。

「本当に孝一なのね。ずっと待ってた」と、その孝一の胸の中でそっとつぶやいた。

その時、桂子の目からポロリと涙が流れ落ちた。

6章　そしてドイツ　7節

「やれやれ、人間ってのは面倒な生物だ」と、それまで一体どうなるんだろうと、かたずを飲んでそばで見ていたトムがそう言った。

その言葉で桂子はトムがそばにいる事に気が付いた。

そして「まあ、トーマス、何故ここに」と、言って一旦孝一の胸から離れ、トムにハグをした。

「孝一もそうだけど、二人が何故ここにいるの」と、改めて疑問に思っていた事を口にした。

「知ってるか、俺には従妹がいるんだぜ」と、トムが言ったが、桂子は

「それがどう関係あるの」と、聞いたが思い当たる節があったので

「あっ」と、小さく叫び、「キャスリンなの。従妹って」と、トムに聞いた。

「ご名答」

「じゃあ、貴方がカップルの一人なの」と、孝一に尋ねた。

「ああ、そうだ」

「じゃあもう一人の女の人は、それよりキャスリンはどうしたの」と、一度にいっぱいの質問をした。

「まず、キャスリンだが、もうすぐ美奈代とＩＣＥでミュヘンにつく頃だろう。」と、孝一が言うと、桂子は『まあ』と、言う顔をして口が半開きになりそうになった。

「え、でも、なぜ美奈代が一緒なの」と、またしても桂子の頭の中が混乱しそうになってきた。

孝一とトムは、アメリカで有った事を話し、そして今回の計画を立てた事を説明した。

「じゃあ。あつしも来るの。私。どうしたら良いんだろう」と、うろたえる様に言った。

「普通でいいさ、まあ、あつしも桂子が未だにパリにいる事と思っているらしいので、ちょっとびっくりするだろうけどな」と、あっさりと言った。

「でも、何であつしと美奈代まで、ここで会うようにしたの」

「そうだ、俺たちだけ幸せになって良いのかなと思った。ただそれだけだ。美奈代もあつしに会いたがっていたのは、キャスリンから聞いて知っているんだ」と、孝一がそう言った。

「俺たちは友達で、それぞれ最初は組み合わせを間違えたんだ。その事を何時までもしょってちゃあいけないだろう。間違っていたなら直す。若い俺たちだから出来ることなんだ。そしてそれが今なんだ。さっきも言ったように。今が大事だしこれからも大事なんだ。過去も大事だけど、直せるべくは直すべきだと思う」と、孝一は力強くそう言った。

桂子も今度は「うん、そうだね」と、頷いた。

7章　再会　1節

その頃、あつし、美奈代とキャスリン達を乗せたＩＣＥが、小雨の中をミュヘン駅に向かっていた。

三人は時間的に同じ列車になり、乗り合わせていたのだが、あつしと美奈代は当然お互いが同じ場所に向かっている列車に乗り合わせている事など、思っていなかった。

ただ、キャスリンは孝一からの電話で同じ列車に乗るだろうと連絡を受けていた。

少々気をもんでいたが、キャスリンはあつしと直接合った事は無いので、顔を見ても分からなかった。

『まあ成るようにしか成らないでしょう、列車の中での遭遇があったら、それはそれで仕方ないでしょう』と、半ば諦めていた。

それより、ミュンヘン駅で逢わそうと、画策している自分たちの勝手より、本人たちが自然の成り行きによって再会するのが、本当は良いのだろうとも、思っていた。

まあそんなキャスリンの心配も無駄に終わり、三人は遭遇せずにＩＣＥがミュンヘン駅に着き、２人と１人はそれぞれホームに降り立った。

キャスリンは、ミュヘンに到着した事をトムに携帯電話で伝えた。

また、あつしも孝一に電話入れていた所だった。

二人の電話から美奈代とキャスリンたちが売店に近い所に降りたことが分かり、美奈代をそこに置き去りにするようにした。

キャスリンは、売店まで行きそこで立ち止まり、
「ごめんなさい、ちょっとここで待っててくれる。トイレに行きたいの」と、美奈代をそこで待っているようにした。

あつしは、ベルリンで列車に乗る前から、その売店で幸一と待ち合わせをするようにしていた。

しかし着いた事を知らせようと電話をすると、何故かホームに降りた場所を聞かれたが、素直にそれに答えた。

すると孝一の「それじゃあ売店の前でな」と、言う言葉で、またしても一方的に電話が切れた。

「まったく自分のペースだな」と、またしても携帯電話に毒づいたが、すでに通話は切れていた。

ワールドカップの決勝トーナメントの試合が、明後日あると言う事で、駅は、日本のサポーターとその対戦国と思われるサポーターの人々が、たくさん列車から降りてきていた。

あつしはこの駅はもちろん初めてなので、みんなが歩く方向に歩いていった。

ホームのはずれと言うか、駅の屋根が付いている所まで来ると、確かに孝一の言ったように大きな売店らしき物が見えてきた。

そちらに向かいながら、孝一達が来ている筈なので売店の周囲を見回してみた。

人が多く探しにくかったが、ゆっくりと見回していくと、所載無げに居る一人の女性が目に留まった。

7章　再会　1節（後書き）

いよいよ次節は、あつしと美奈代の再会です。

7章　再会　2節

あつしは『似ている』と、思いつつも『そんなはずがあるわけが無い』と、心の中で葛藤が生まれた。

当然そこに居たのは美奈代だったが、あつしはドイツに来て、こんな所に美奈代が居よう筈が無いと思う反面、目の前の女性が誰なのか近くに行って確かめたいとも思っていた。

しかし、美奈代でなかったら、気持ちが落胆すると分かっているので、またそれも辛かった。

売店に近づき、その女性とも数メートルの所まで来た時、ふとこちらの視線を感じたのか、その女性があつしの方に顔を向けた。

「みなよ？」と、あつしは、目の前にいる女性が美奈代である事を確信し、そして美奈代が居る事が信じられないと、言った風な声でそうつぶやいた。

ささやくような小さな声だった。しかし沢山の人々が行きかう中で、美奈代はその声を聞き分けていた。

そして、あつしがこちらに来ているのを認めると、じりじりと後ずさりを始めた。

それを見たあつしは「待ってくれ」と、叫んだその瞬間、あつしの声が号令だったかのように、美奈代はあつしと反対方向に走り始めた。

あつしは売店の所に着いて、呆然と今自分に何が起きているのか理解しようとしていた。
すると後ろから、

「何やってんだか、荷物は俺が見て居てやる。早く追いかけねえと、また見うしなっちまうんじゃあないのか」と、トムがあつしを叱咤するように、けしかけた。

あつしは振り返り「トム」と、言ってまだそこに立っていたので、「ほれ、早くしろ」と、トムが顎をしゃくるようにした。

あつしはトムに驚いたような顔をしたが、トムやおそらく一緒に来ている孝一の考えが分かったような気がして、トムにうなずき、

「待ってくれ、美奈代」と、あつしは声をかけながら美奈代の後を走っておった。

すぐにあつしは追いつき、美奈代のすぐ後ろまで来た時、
「まてよ、何で俺から逃げるんだ。ちゃんと話しをさせてくれ。いきなり逃げ出さないで、もう俺の前から居なくならないでくれ」と、精一杯の声で美奈代を呼び止めた。

さすがに力のある声で、美奈代が走るのを止めるには十分な力があり、美奈代は立ち止まり、あつしの方を振り返った。

その目には涙があふれていて、涙の粒が落ちそうだったが、美奈代はそれを一生懸命こらえているように見えた。

それを見たあつしは、今彼女は真剣に物事を考えようとしているのだと思った。

もし、ここで大泣きに泣かれていたら、多分『やれやれ、困った。どうすれば良いのかな』と、戸惑っただろうが、そうではなかった。

彼女が真剣に向き合おうとしていると思うと、あつしの心に熱いものが湧いてきたし、あつしも真剣になった。

7章　再会　3節

「私は」と、美奈代は一旦言葉を切りそして、「私は、もうあなたに会える資格の無い女よ」と、あまり大きな声ではないが言った。

二人の間にはまだ少しの隔たりがあり、その間を人が通り過ぎていた。

またコンコースには人がいっぱい行き交っていて、周りは人の行き来で騒がしかった。

しかし二人にはお互いの声と、姿しか見えていなかった。

周囲の風景は色を失い、白黒の映画みたいだった。

「そんな事は無い、それは俺のほうだ」

「そうね、あなたは私を傷つけた」と、美奈代が言うと、あつしは急に体の力が抜け、頭を垂れて、「そうだ、俺は君の気持ちを裏切ったんだ」と、つぶやいた。

「私は許せなかった」と、美奈代。

「それは・・・」と、言葉を詰まらせるあつし。

しかしその後、美奈代は思わぬ事を言い出した。

「あなたを許せなかった。最初はそう思ってた。だけど本当はあなたを許せない私自身を許せなかったの」と、あつしの目をまっすぐ見つめ、そして、

「でも、今はあなたを許せる、あなたは私を許してくれるの」と、言うとあつしは再び美奈代に顔を上げ、

「許すか、許さないかだったら、俺は許す」と、言い捨てるかのようにあつしが言いそして、

「それは俺も同罪なんだ。そんな事より、僕の心が・・・いや、タマシイが君を必要としてるんだ。君の所在が分からなくなって、僕の魂はずっと何かを捜し求めてた。他の女性とも恋をしようとした事もあった。だけど誰とも心がつながらなかった。僕の魂が君を探してたんだ。俺にとって本当に必要なのは君だったと気が付いたんだ」と、一気にここまで喋り、再び力なくうつむき、

「俺の魂が君を、求めるんだ。今までその事に、耐えるのがとても辛かった」と、言った。

その言葉を聞いた美奈代は、そっとあつしに寄って来てあつしの手を取り、

「わたしで・・・、本当に、わたしで良いの」と、そう聞き返していた。

「君でなくてちゃあ、僕の魂は救われないだ」と、あつしが言うと、美奈代はもう黙ってあつしの胸にしがみついていた。

あつしもそれに応え、しっかりと美奈代を抱きしめた。

美奈代の目からは、この４年間泣いてしまえば自分が崩壊してしまうのではないかと、ずっと堪えていた涙が、後から後からあふれ出てきていた。

しかし今は、安心できる人の胸にいだかれているから、もう崩壊の涙ではなかった。

それは、喜びの涙だった。

7章　再会　3節（後書き）

俺も言って見たいなぁ、あつしの様なせりふw

7章　再会　4節

「さあ皆が待ってる。あっちに行こうか」と、あつしが美奈代の肩を抱き、先程の売店の方に歩いた。

あつしは皆と言ったが、孝一とトム位だろうと美奈代は思っていたが、そこに居たのは孝一、トム、そしてその横に、あつしは会ったことの無い女性がいたが、もう一度孝一の方を見ると、その横に桂子が半分隠れるように、孝一の後ろに居た。

美奈代はもちろんの事、あつしも桂子の姿を見た時は驚いた。

美奈代は、一瞬立ち止まりそうになったが、あつしは、美奈代の肩をしっかり抱き、二人は立ち止まる事も無く、売店近くの４人の所まで行った。

「よう」と、あつしは平然を装い孝一に手を上げた。

「よう」と、孝一も返したが、「お前、それ以外に何かもっと気の聞いた挨拶は無いのかよ」と、あつしを指さしながら言った。

「そうは言ってもなぁ、何がどうなってんだか、分かるか。今俺がどれほど混乱してるか」と、皆の顔を見回した。

あつしのとっては、見知らぬ女性の方を見ると、トムが、

「ああ、この女性は」と言いかけると、

「キャスリン、あなたがこれを・・・」と、美奈代は言い『仕組んだの？』と、言う言葉は飲み込んだ。

「そう、トムとね、そして孝一と3人で相談したのよ」と、楽しげに言うものだから、美奈代は、『なぜ行く前に言ってくれなかった』と、抗議するつもりだったが、その気がうせた。

「久しぶり」と、あつしは桂子の方に言うと、
「ひさしぶり」と、桂子もオウム返しに言った。

「ところで何が、どうなってるのか、誰か説明してくれないかな」と、改めて4人の顔を見ながらあつしが言った。

「まあ、皆が顔を合わせられるよう、俺たちが画策した。ただそれだけだ」と、孝一は、一言で済ませた。

「まあ、簡単な説明だな。まあいいか。それでそっちはどうなってるんだ」と、あつしは、孝一と桂子の顔を見た。

「うん、まあまあだ」と、桂子の肩に手を回した。

「なるほどな」と、あつしは言い、「俺たちも、まあまあだ」と、言って美奈代の肩を抱いた。

ここに居る6人にとって、その言葉だけで今は十分だった。

8章　友再び　1節

「うわぁ、よかった」と、キャスリンが感嘆の声を上げると、トムが、
「よかったな、こうなったのもキャスリンのおかげだな。何かご褒美を上げなくちゃあ」と、トムは言った。

「わたしはなにも・・・」と言いかけていた時、トムが突然キャスリンの正面で片膝を付き、おもむろに内ポケットから小箱を出した。

そのフタをパカリと開けると、その中にはダイヤの付いた指輪が入っていた。

周りを行き交う人々も、男性が片膝を付いた時点で何が起きるのか予想していた様で、ちらりほらりと人が、その行方を見守るために立ち止まり始めた。

「キャスリン、僕は君とずっと一緒に居たい。僕の妻になってくれ」と、突然ポロポーズした。

「え、ちょっと待ってよ。だって生活もままなら無いのに、無理言わないでよ」と、キャスリンが言うと、
「それは大丈夫だよ。俺たちメジャーデビューが決まったんだ」と、横から孝一が言った。

「おい、孝一それは俺のせりふに取っといてくれよ」と、トムが決め台詞にしたかったらしく、泣きそうな顔で孝一を睨んだ。

「とりあえず、契約金とか入るので、生活は大丈夫だ」と、今度はトムがキャスリンに向かって言った。

「そう、それじゃあ仕方ないわねぇ」と、如何にも仕方無さそうに言ったが、内心いつポロポーズしてくれるのだろうと、ずっと待っていたキャスリンは、その思いを一生懸命隠しながら受けた。

美奈代と桂子はそろって「おめでとう、キャスリン」と、キャスリンに抱きつき祝福した。

周りで様子を見ていた人達からは、拍手が沸き起こり、「おめでとう」と、トムに握手をしてくる者も居た。

「ありがとうと」と、言いながらトムは立ち上がり最後にあつしと孝一の祝福を受けた。

トムは、キャスリンの右手の薬指に先程の指輪をはめ、そして二人は抱き合いキスをした。

そうすると再び、周りから拍手が沸き起こり、今度は二人に「二人の人生に幸あれ」と、どこからともなく誰かが祝福した。

ひと段落し、周りの人々も三々五々散らばって行き、再び6人の集団になった。

8章　友再び　2節

そこから皆は、キャスリン達のアパートまで行き、明後日のサッカー観戦のことを話し合った。

チケットは4枚しかなく、結局日本の試合だと言う事で、トムとキャスリンは他の4人に行くようにしてもらった。

キャスリンは結婚となると、ここミュンヘンを離れる事になるので、できればトムとここに一緒に居られる少ない時間を、2人で町を歩いてみたかった。

そういう事で、あつし、孝一、美奈代そして桂子が予約していたホテルに移動した。

ホテルに着いて、荷物を一通り置くと、皆が一つの部屋に集まった。

「ごめ・・」と、桂子が美奈代に近づきながら、謝罪を口にしようとした時、「待った」と、孝一が急いでその言葉を止めた。

「なあ、俺たち謝りあうのはいい、確かに俺たちはお互い傷つけあった。でもそれは誰かを傷つけようとか、自分さえよければそれで良い等とは考えても居なかったはずだ」と、孝一は続けた。

3人は黙って頷きながらそれを聞いて居た。

「なあ、昔のようにケンカした後のようにこれからも4人仲良くしようって、それでいいじゃないか。ただ俺は桂子の事が好きだっ

て事は、もう隠さない」と、鼻の頭を照れくさそうに掻きながら、孝一がそう言った。

「そうだよな、それがいい、孝一も宣言したから、俺も言うが、俺は美奈代が好きだ」と、あつしもそれに続いた。

美奈代と桂子は手を取り合い、笑いながら「そうね。私達も同じだから、そうしましょう」と、笑いあっていた二人だが、何時しか二人の目から涙が零れ落ちていた。

お互い言葉は無くとも、許しあった瞬間だった。

8章　友再び　3節

2日後、スタジアムは思わぬ熱狂に包まれていた。

スタジアムのメイングラウンドでは、ワールドカップの決勝トーナメントの1回戦があり、B組2位だった日本と、A組1位のヨーロッパの強豪国チームとの試合があった。

試合は0対0のままで、後半終了間際までどちらが勝つか分からないような試合だった。

しかし勝利の女神は、ロスタイムの2分間だけほんの少し日本に微笑んでくれた。

それはあまりにもあっけなく、またゴールとしてはいわゆる泥臭いゴールだった。

日本選手のミッドフィルダーが放ったミドルシュートは、ゴールから20メートル地点あたりからの当り損ねのシュートで弱々しく、相手のキーパーの前に居る敵選手のところにふらふらと上がった。

それを相手のデフェンダーがヘッドでクリアしようとしたが、シュートそのものにスピードがなく、当然ヘッドでのクリアも弱々しいものになった。

ポロリと落ちるように転がったボールが、たまたま詰めていた日本選手の足に当った。しかも当ったボールは、ノーマークでゴールの前に居た日本選手のフォワードの前に転がったのだ。

そのフォワードはそのボールを冷静に、そして確実にゴールに押

し込んだのだった。

スタジアムは一瞬静まり返った。

相手国のサポーターは信じられないと言った面持で絶句し、また日本のサポーターは喜びのあまり絶句した

しかしその後、怒号ともつかない両国サポーターの声で、スタジアムは正に熱狂のるつぼとなっていた。

その試合の帰り道、ゆるい坂を4人で歩いて下っていた。

孝一が、桂子の袖をちょっと引っ張り「なあ、ちょっと話があるんだけど」と、桂子に耳打ちをした。

「え、なに」と、少し二人は立ち止まり、あつしと美奈代が先を歩くような恰好になった。

「俺と、」と、言いかけ「歩きながら話そうか」と、あつし達の後を少し離れて後を追うような格好で歩き始めた。

「俺とアメリカに来ないか」と、孝一が言うと、

「でも」と、桂子はためらった。

「いや、結婚しようとかそう言った意味じゃあないんだ。そばで暮らさないか、と、そう言ってるんだ。まあ、将来は結婚をしたいと思ってる」と、そこまで言った時の事である。

坂の上から、暴走してきた車が、孝一達の前を行きすぎ、そのままあつし達2人にまっすぐ突っ込んで行った。

8章　友再び　4節

桂子は思わず「あぁー」と、顔を覆ったが孝一はしっかりとその車の行方と、前方にいるあつし達を見ていた。

車がぶつかる刹那、孝一は二人の姿が薄れたように見え、次の瞬間には車が街灯の支柱にぶつかる「どかーん」と、言う音を聞いた。

孝一は、一瞬駄目かと空を仰ぐと、そこに東京で見た宇宙船のような物が見えた気がしたが、しかし今はそれ所ではなかった。

事故の様子を見てあわてて駆け寄ったが、車があつしたちの手前にある街灯の支柱で止まり、あつしと美奈代はその後ろに倒れて居たが、どうやら大きな傷はなさそうだった。

「あつし、大丈夫か」と、孝一があつしに声を書けると、「ああ、大丈夫だ。俺は一体なにしてたんだっけ」と、わけの分からない事を言っていた。

しばらくぼんやりしていたが、「ああ、そうだ車が突っ込んできたんだっけ」と、うわごとのように言うので、孝一はとりあえず病院を二人を連れて行き、精密検査をさせた。

検査の結果は、身体的には異常はなかったが、時折二人がおかしな事を言っていたのだが、それは動揺しておかしな事を言っているのでしょうと、言う事になった。

病院を出てホテルへの帰り道、路上であつしが美奈代を呼び止め、「俺と東京に帰らないか、そして一緒になろう」と、ポロポーズを

美奈代に言った。

美奈代は素直にこくりと首を縦に振り、日本に一緒に帰る事にしたのだった。

そして翌年、二人はごくわずかの人達を招待し、結婚式を高原のチャペルで行う事にした。

それはよく晴れた日だったけれど、何故かチャペルの上空に、二人の門出を祝うかのように一塊の丸い雲がぽっかりと浮かんであった。

8章　友再び　4節（後書き）

最後はちょっと間の抜けた文章になりましたが、本文はこれにて終了です。
長く、へたくそな文章で読み辛かったとは思いますが、ここまで読んで頂き大変ありがとうございます。

エピローグは、方向の違う物になっています。

エピローグ

あつしと美奈代は、東京に帰ってきて、二人で聖橋の所まで来た。

この先に、あつしのアパートがあるので、二人で帰る所だった。

あつしが、ふと足を止め物思いにふけるようにたたずんだ。

2年前大学を卒業して、旅行に出た時の事を思い出したからだ。

あの時ここを通ろうとした時、どこからともなく聞こえてきたメロディ、そしてその後、美奈代の事を思い出したことなどだった。

あの時に、リュックの中に入れていたオルゴールは、今、アパートの押入れにしまってあった。

帰ったら二人で聞いてみたいと思ったその時、美奈代が

「何考えてるの」と、聞いてきた。

「私はね、あの夏休みの時の事を思い出してたの」と、にっこり微笑んだ。

あつしはこの微笑だけで十分だと、思った。他に無いも要らない、ただ美奈代がそばに居てくれればそれで幸せだと思った。

そんな二人を、遠くから見ていた男が居た。

その男は雨雄と言い、その雨雄の頭に直接メッセージが入った。

「ぼっちゃん、そろそろ行きましょうか、時間がありません。帰る時間は同じ時間にしないとまずいですよ。これからチャペルの方にも寄るんでしょう」と、言う内容の通信だった。

「判った」と、雨男が返すと、雨男の姿はスッと消えた。

雨男たちは時空を越え、一つのチャペルの上に宇宙船で居た。

センサーでチャペルの中で行われている、あつしと美奈代のの結婚式を、細部にわたって見る為に低空で居たのだった。

その宇宙船は偽装のため周りに霧を発生させていて、あたかも雲のように見せかけていた。

エピローグ（後書き）

このエピローグは、本作品の流れとは少々異なっています。
それは、私が書いたもう一つの作品『青い蝶』へと繋がっている為です。
作品中にも通常ではありえない事が起こっていますが、それらは『青い蝶』を読んで頂ければ、疑問が解決されると思います。
その為にも、ぜひ『青い蝶』の方も読んで頂ければ幸いです。

尚、『青い蝶』のジャンルはＳＦになります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5256q/

雨の物語

2011年10月8日15時06分発行